
LionKnight

紅月玖日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LionKnight

【コード】

N6920N

【作者名】

紅月玖日

【あらすじ】

エリカのことを守る。

決意したレオの話。

第一話

「霧夜さん！ お話を！！」

「キリヤグループの頂点に立った気分はいかがですか！？」

「この就任には陰謀があるなどと噂されていますが、実際のところはどのようなのですか！？」

エリカがホテルの一室で、世界を相手取ったマネーゲームを始めると宣言してから三年。

たった三年で、彼女はキリヤグループの頂点に立った。

他の並み居る候補者を蹴り落とし、時には蹴落とされそうになりながらも彼女はその戦いに勝ったのだ。

今日はそんな彼女の就任が決まったところで、各社の重役達が全て入り切るほどの大きな会議室から出ると、各種マスコミが待ち構えていた。

「とりあえず頂点に立ったのは気分がいいわ。陰謀？ 随分な言い方されてるわね、とりあえずノーコメント」

「そういうことだ。道を開けてもらっぞ」

エリカの危機を幾度も救った女性、乙女さん。

スーツを着込んだその姿は一見、一流の秘書のようにも見える。

しかし事が起これば、そんな装いが嘘であるかのような活躍をすることを、俺は高校時代から知っている。

この間は、遂に眼力だけでライオンを屈服させたと、笑顔で嬉しそうに語られたが、正直どう返事していいものか分からなかった。

「エリー、これまずいよ。早いとこ抜け出さないとして、わ！わわわ！」

エリカに耳打ちをしながらも、記者の波にさらわれそうになる佐藤さん。

昔からずっとエリカの補佐と、ブレーキ役　止められたためしがないが　を勤める苦労人。

記者の波を一生懸命掻き分けようと頑張る佐藤さんを見ながら、微妙に口元をゆがめるエリカ。

あれは絶対に楽しんでいる、間違いない。

しかもこれを趣味にしている節があるのがまた困ったものだ、止めると俺に矛先が向くのは学習済みなので、助けることはできない、ごめん佐藤さん。

そして俺は今、エリカと佐藤さんの仕事を手伝いながら経済についての実践力を付け、空いている時間は乙女さんに護衛としての訓練をつけてもらっている。

大学で勉強した経済学だけではいかんともし難いところがある経営も、ようやくノウハウが分かってきたところ。

護衛としての訓練のほうは、乙女さん自身がスパルタと称する訓練をこなしてきたお陰か、半年ほど前によくエリカの近くを固めるSPに選抜された。

それでもまだ一番弱いため、エリカからは十メートルほど離れた場所に位置する。

一日でも早く、エリカの隣に立ちたい。

それが乙女さんのスパルタ訓練を乗り切る一番の原動力なのは、言うまでもなくバレバレらしい。

あの乙女さんにも言われてしまふところを考えるに、相当なものだと思う。

だけどそれも仕方ない、俺はあの日にエリカの騎士になるって誓ったのだから。

第二話

何とか記者の群れを抜け出し、エリカと佐藤さんが車に乗ったのを見届けると、後に続くSP専用の車に乗り込む。

あの二人と同乗するのは乙女さんと、それに次ぐ実力の先輩SPが運転手を勤める。

つまり、常に行動を共にするには、腕利き揃いとされているこのSP達の中で、最低でも二番目の実力を身に付けなければならぬということだ。

『おい、どうしたレオ？ いつもにもましてシケた面してんぜ』

『まあちよつとね、昨晚彼女にお預けを喰らっただけだよ』

『ははは！ そりゃあシケた面にもなるってもんだなあ！』

エリカのお陰で覚えた英語のやり取りも大分慣れ、こうして他のSP達と軽口を叩けるまでになった。

ちなみに俺が選抜された時、乙女さんが紹介してくれたのだが、俺がエリカの騎士だとかなんとか言ってくれたお陰で、俺とエリカの仲はSPの間でも公認されている。

勿論全員がプロ、しかもエリカのカリスマ性に惹かれた人物達なので、スキヤンダルになりそうな俺とエリカの関係が漏れる事はま

ずないだろう。

少しばかりデリカシーに欠けるといっつか、男らしいといっつか、そんな連中だけどとてもいいやつらだ。

乙女さんを中心に組まれた十名、それがキリヤの精鋭部隊として活動している俺達の事。

他の世界的企業が有する精鋭部隊と比べても、その実力は抜きん出ているといわれるほどの部隊、その末席とはいえ加われていることが未だに俺は信じがたい。

なんせ他のメンバーは各分野におけるスペシャリスト達なのだから。

それに比べて俺はまさにオールラウンダー、可もなく不可もなく全てをこなす器用貧乏。

皆は俺みたいなバックアップ役が居ると動きやすいと言ってくれるが、俺が目指すのはバックアップ役じゃない。

乙女さんのように、一人でもエリカを護り抜ける様な人物、騎士。

そこに至る事が、今の目標と言えるだろう。

先はまだ長そうだ……

「で、レオ。こないだの宿題はできたのかしら？」

「いや、まあ、一応……」

「一応？ 一応なんてレベルでできるほどあなたの頭はよかったかしらね？」

「ぐ、それは言葉のあやつりもので……」

「そ・れ・じゃ・あ、もちろん完璧にできてるわよね」

「エリー、あんまりいじめちゃ、対馬君がかわいそうだよ」

「いいのよっぴー、レオは叱られて伸びるタイプなんだから」

そんなことはないと反論したいところだが、この状態のエリカに逆らうとよくない事になるのはわかりきっている為、大人しくしている。

それにしてもエリカは、こっちのほうの実力が護衛としての実力に比べて劣っているのが気に喰わないらしく、宿題と称して自分の仕事の一部をまわしてくるのだ。

一度、なんでまだまだ実力が伴っていない俺に対して、エリカの仕事をまわしてくるのかをたずねたところ、

「だって私が直々に鍛えてあげてるのに、乙女さんとの特訓の方が効果が高いみたいで、負けてるように感じるのが嫌」

との事で、ただ単に俺の向き不向きの問題じゃないかと言ったら、問答無用で蹴られた、理不尽だ。

だけどそれは、まだエリカの隣に立てるほどの力量がないといわれているのと同じで、だんだんとネガティブになる思考をとめることができない。

「ま、私の隣に立つ男だからね、それなりの力をつけてもらわないと」

「エリーの基準が厳しすぎると思っただけだな」

「甘い、甘いわよっぴー。私を誰だと思ってるの？ この私の隣に立つ男よ、これくらいで満足なんてできないわ」

分かってはいたことだけど、改めてとんでもない条件を突きつけられたような気分になる。

もっとも、これでも最近は大分マシになっていて、初めのころはそれこそ虐待と呼ぶにふさわしい仕打ちが……まあ、それは余談。

「それに、レオは絶対に私が望むところまで登ってきてくれるわ。なんせ、私のナイトなんだからね」

そう言って俺にウインクをするエリカ。

ああもう、いきなりそんなことをされるのは苦手だっていうのに、エリカはそれを楽しんでいるんだろう。

熱くなる頬もそのままに、俺は佐藤さんの冷たい視線と、エリカの好奇の視線に晒されるのだった。

第三話

しんと静まりかえっている部屋に響く音は、標的を動かすモーターの小さな駆動音。

両腰のホルスターに収められた重みを心地よく感じながら、約二十メートル先に出現するだろう標的を待ち構える。

腕はだらりと下ろした自然体、しかし即座に反応できるように全身の筋肉をたわませ、意識を集中する。

カシャリ、と微かな音と共に出現する二つの標的。

それを視認した瞬間、ホルスターから銃を抜き出し両のトリガーを引き絞る。

片方三発、合計六発分の銃声がコンクリートの壁に反響し、耳の奥に残響を残す。

片手で拳銃を撃ったおかげで、反動による軽い痛みを両腕に感じる。

キリヤの技術力を用いて造られた俺専用の銃。

二挺一組であり、射撃時の反動は現存している銃の中では最も小さく、片手で扱うことを前提にしてある。

ただし反動を抑えた為に、一発分の殺傷能力は比較的低い。

そこで俺はその欠点を補うために、一回の射撃につき三回トリガーを引く。

それにより命中率と殺傷能力を向上させた代わりに、両腕にかかる負担は大きくなってしまった。

何かを得るには何かを犠牲にしなければいけないという、いい例だとつくづく思う。

『レオ、相変わらずその銃を使ってるのね。腕壊れちゃうわよ?』

『大丈夫だよ。そんな柔な鍛え方してないし』

『オトメの特訓でボロボロにされてるのを見ると、その言葉をどこまで信じたらいいものかしらね』

腕を軽く振りながらしびれを逃がしていると、ドアを開けて一人の女性が入ってきた。

黒く艶やかな髪をショートカットにした長身、長距離射撃のスペシャリストであるアセンブラだ。

『いや、それを言われると返す言葉もないけどさ』

『それにしても、ホント見栄えのするスタイルよね。わたしもそれ造ってもらおうかしら? もう、スコープ覗いてると肩こるし寒い』

『勘弁してくれよ。アセンブラがこれ練習したら、俺の存在意義に
関わる』

そんなことを話していると、人の上半身をかたどった標的がすぐ
近くまで移動してきていた。

六発中四発命中、いつも通りの調子だ。

『……未だに頭部は打てないのね。美德ではあるけど、いつか命取
りになるわよ』

『わかってはいるんだけど……』

腹と右胸の辺りに空いた銃痕を見ながら、言葉の意味を噛み締め
るように呟く。

『こればかりは訓練だとか説教だとかで何とかなるものじゃない
しね。ま、お姫様を護るつもりなら、覚悟だけはしておきなさいよ』

『そつだよな……ありがとう、アセンブラ』

後ろ手に手を振りながら部屋を出て行くアセンブラ。

俺は傍らにあるボタンを押し、もう一度同じ訓練を行う。

「覚悟……か……」

呟いた言葉は、六発の銃声かき消されていた。

第四話

『今回のパーティーでは、他の組織が動いているという話もある。各員気を抜くなよ』

『大丈夫だよオトメ、俺はだってプロだ。何があるともお姫様は守るさ、なあレオ？』

『そんなの当たり前だよ、俺はエリ力を護る為だけにここに居るんだから』

『よし、それでは準備をして三十分後、再びここに集合だ！』

乙女さんの言葉を聞くと、各々自分の必要なものを準備しに部屋を出て行く。

その表情はみな気楽なもので、俺とは桁の違う戦場を経験しているんだと、いやおうなく思わされる。

「レオ、いつも言っているがあまり気を張るな。お前は強くなったが、それでもまだ十分とはいえないんだからな」

「分かってるよ乙女さん。だけど俺にだって退けない一線はある。俺はもう高校時代とは違う、本当の意味でエリ力を護る騎士になったんだ」

「……レオ」

悲しそうに呟く乙女さんを背後に、俺はロッカールームに入り自分の荷物を選別していく。

まずは仕事着としているスーツに着替える。

一見すると普通のビジネススーツにも見えるが、生地には極細のワイヤーを通して防刃性を増してある他、さまざまな暗器類を忍ばせる事ができるような裏ポケットも多く付いている特別製だ。

二挺の愛銃、そのマガジン、近接専用のコンバットナイフに小型化された閃光弾、それらを腰のホルスターや上着の裏ポケットに忍ばせる。

あとはワイシャツの上に防弾チョッキを着るというのが、他のメンバーの基本装備になるのだが。

俺と乙女さん、アルフという近接戦闘のスペシャリスト、この三人だけは防弾チョッキを着込まない。

なぜかといえば、防弾チョッキを着ると、ほんの僅かとはいえ動きに制限ができてしまう。

そしてその制限が、近接戦闘の中では致命的なものになることも少なくない。

乙女さんのおかげで、多少の銃撃なら軌道を予測して避けられるくらいまで身体能力も上げられたし、動きを制限するものは少ない方が、俺達には都合がいいのだ。

最後にスーツの上着を着込み、軽くその場で跳ねて具合をみる。

「なあレオ、せめて防弾チョッキを着てくれないか？ そうしないと私は心配だ」

「大丈夫だつてば、乙女さんは心配性だね。避けるのもかなり身についてきたし、当たらない自信もあるよ」

「そうか……もう一人前といっても差し支えないくらいの実力だからな、それでお前がいいと言うならいいんだ」

「俺の仲間は頼りになるやつらばかりだからね。そうそう簡単に銃口の前に晒されたりはしないよ」

一流。エリカの近辺を守るSPは超一流、その一つ周りを固めるSPは一流。

その中を潜り抜けてくる事は容易じゃない、相手も一流以上の精鋭でなければ、俺達がやられてエリカに被害がいく確立なんてほぼ零とっていいだろう。

「勿論、一番頼りにしてるのは乙女さんだからね。もし大変そうだったらすぐに助けてくれるんでしょ？」

「それは当たり前だ、私はレオのお姉ちゃんなんだからな」

「それなら何も心配ないじゃないか、乙女さんがいれば百人力だよ」

そんな軽口を叩くと、心配一辺倒だった乙女さんの表情が多少和らぐ。

乙女さんがこれだけ心配してくるってことは、今回相手しなければならぬ組織は相当な手練れなのかもしれない。

だけど俺はしっかりとエリ力を護ろう、それこそ命を懸けてでも。

第五話

「……なんで俺がここにいるんだ？」

「あら、レオは私と一緒にいるのが嫌なの？」

俺の疑問も当然だろう、まるで走っていることを感じさせないリムジンの中、俺の隣にはエリカ、その正面に乙女さん、その隣に佐藤さん。

普段ならこの後を走っている黒塗りの車に乗っている俺は、エリカに引つ張られ佐藤さんに押され、リムジンの中に押し込まれていた。

「だけど、よく鉄先輩が許可しましたね。今まではいくらエリカが言っても、レオはまだまだ未熟者だ、って言ってたのに」

「私はせめて、鉄パイプを使って、放たれた銃弾を弾けるくらいの実力がつくまでは、ここに乗せるつもりはなかったのだが姫がな……」

「いや、そんな芸当ができるのは、俺たちの中でも乙女さんしかないって」

「何を言うか、レオにはそれくらいこなしてもらわないと、私の面目が立たないじゃないか」

確かに乙女さんの実力は世界でもトップクラス、そんな人が直々に指導しているのだから、俺もそれなりの実力にならないといけないといえ、乙女さんクラスまでになるには、まだまだ時間がかかるだろう。

いやむしろ、乙女さんの領域には到達せずに終わる可能性のほうが高いことだろう。

「乙女先輩が言うことも一理あるわ。だけど私から見れば、レオは十二分にSPとしての役割を果たせると思うんですけど、どうなんでしょうか？」

「……それは機会があったら話ささ」

「ふうん、まあいいわ。いつか必ず話してもらいますからね」

そんな風に当事者である俺を尻目に、俺の能力についての会話をする二人。

まさかエリカがそこまでSPとしての俺を評価してくれているとはかけらも思わなかったので、これはこれで貴重な体験ではある。

仕事に関して、いつもならば褒めるなんてことはもちろん、素直に何かを認めてくれることすら少ないので、こういうのはなんだからうれしい。

「対馬君、口元緩んでるよ?」

「えっ!?!」

佐藤さんの言葉に驚き、慌てて手を口元にやると、その行動を見たエリカが慥然とした表情で睨んでくる。

そんな俺たちを乙女さんは呆れたように、佐藤さんは微笑ましく見ていたが、俺は正直生きた心地がしない。

昔からエリカのこの表情にはいい思い出がないのだ。

そうしてエリカが口を開こうとした瞬間、車がその速度を落とし、目的地に着いたことを知らせる。

そのタイミングに興を削がれたのか、まあいいわ、なんて言いながら降りる準備をするエリカ。

準備が終わり、ドアが開けられ、俺と乙女さんが先に出て壁になるように立つ。

そしていざエリカが降りようとした瞬間、それは起こったのだっ

第六話

エリカの片足が地面についた瞬間だろうか、その場に集まったメディアの中から、不自然に一人の男が飛び出す。

そして構えるその手には拳銃が握られ、その銃口の先にはエリカの姿が！

重苦しい銃撃音が響く前に、俺たちよりも先に展開していたSP達が壁を作り、エリカへの直撃を避けた。

しかしその代償か、一人のSPが腹部に弾丸をうけ、血を流しながら倒れようとしている。

その倒れる姿を見届ける間も無く、俺たちは行動を開始していた。

数瞬後、何が行われたのか理解したメディアたちはそれぞれの反応を示す。

大半はパニックを起こし、我先にとこの場から離れようとしているが、一部はこの状況を残そうとカメラをまわしているようだ。

先程の襲撃は一人だが、この混乱に乗じてほかのメンバーが襲ってくる確立もゼロではない。

俺よりも断然に早く動き出していた乙女さんは、その手に持った地獄蝶々で、離脱しようとしていた男の足の腱を切り、既に確保していた。

それを見て流石だなと思うと、視界の端におかしな動きをする人影を三人ほど確認する。

三人とも人ごみにまぎれる形でエリカに銃口を向けているが、その射線にはちょうど俺の身体があるが揃いも揃って狙いをずらすことはしていない。

かといって俺が銃撃をかわすとエリカに直撃してしまう、それはなんとしてでも避けなければならぬ状況だ。

しかも足や腕を撃ちぬいたとしても、それだけで諦める奴らではないのはこれまでの経験で知っている。

これまでは四肢を全て撃ち抜き、殺してしまわないようにしてやってきたが、今この瞬間にそんな暇はない。

次の瞬間には身体が動いていた、腰につけているホルスターから二挺拳銃を引き抜くと、比較的距離が近い二人にポイントすると同時に訓練どおりの三連射。

放たれた銃弾は逃げ遅れていたメディアの人にあたってしまったものもあるが、二人の襲撃者の頭を撃ち抜く事に成功していた。

「っ!!! レオ!!!」

背後からエリカの咎める声が聞えるが、あと一人襲撃者が残っている状態では話もできない。

そいつにポイントした瞬間、腹部と右腕を中心として痛みと熱が全身を駆け巡る。

恐らくは残っていた一人の銃撃によるものだろう、傷口は確認せず、ポイントした状態のままに三連射ずつ、合計六発。

怪我をしている右腕の三発はそれってしまったようだが、残りの三発は胸部に直撃したようだし、動くことはままならないだろう。

少しだけ気を抜き息を吐いた瞬間、痛みは激痛に、熱は灼熱にと変わり、右手の銃を取り落としてしまう。

「レオを後方へ下げろ！！ 姫と佐藤もだ！！ 襲撃は続いているぞー！！」

乙女さんの声に従い、何人かが俺を運ぼうと近寄ってくるが、俺はそれを制し、エリカの護衛を頼んだ。

腹部と右腕から出血している俺をおいていくことに躊躇を示したものの、結局は護衛対象であるエリカを守ることにしてくれたらしい。

『「こら、離しなさい！ レオが怪我してるのよ！ 私よりもレオを！」

『私たちの任務は霧夜様を守ること、そしてこれは彼の意思でもありますー！』

『そんなこと関係ないわ！ レオは私の家来なんだから、こんなところで失うわけにはいかないのよ！！』

振り返りエリカと視線を合わせて、俺は言う。

俺は大丈夫。

次の瞬間、背中から複数の衝撃を受け、先程以上の激痛と熱が俺を襲う。

振り返ってみると胸を撃ったあいつが、倒れた状況から銃を俺に向けていた。

そしてその銃口からは硝煙が立ち昇り、弾丸が発射されたことを意味していた。

俺が呆然としているのを見て満足したのか、そいつは口元を歪めると力尽きたようだ。

「っつ、ぐー！！」

食道をせりあがってくる感覚に耐えられず、口を覆つと、胃液とは違つ、多少の粘性をおびた液体が俺の手に付着する。

「うあ……」

自分が吐血したことを認識すると同時、耐え難い激痛が全身をはしる。

そのまま力が抜けるように地面に倒れると、視界が一気に黒く塗りつぶされていく。

「レオ！ 大丈夫か！？ すぐに治療を！！」

乙女さんの声がかすかにきこえ、そのすぐ後に響いたエリカの悲鳴を最後に、俺は意識を失った。

第七話

シンと静まり返った廊下は暗く、蛍光灯の光もどこか弱弱しく感じる。

その原因としては間違いなく、私たちの前の扉の先にいる人物の様態を気にしてのことだろう。

「手術中」

そう書かれた扉の先には、今も治療を受けているであろう私の弟分。

なぜ防弾チョッキをつけようとしなかったときに、無理やりにも着用させなかったのか。

なぜレオから距離をとってしまったのか。

なぜレオが撃たれなければならなかったのか。

なぜ、なぜ、なぜ。

私がついた行動は、護衛として間違っていないかつたと胸をはっていえるだろう。

だがレオの姉として間違っていないかつたかと問われれば、私は明確な答えを返すことはできない。

無機質な長椅子に座った姫へと眼をやると、傍から見ても心配に

なるほど蒼白な顔色をしている。

隣に座る佐藤はどこを見ているかよくわからないようで、茫然自失といった体である。

それほどまでに彼女たちの心の深いところを占めていた弟に、誇らしさを感じながらも少々の怒りも覚える。

二人のことを考えるならば、まず自分の安全を確保してからだろうに……

しかし一番許せないのは私自身だ。

レオが撃たれ、生死の狭間を彷徨っているというのに、こうまで冷静でいられる自分に嫌気がさす。

ただ腕に覚えがあるだけの高校時代から、姫のスカウトを受けてSPとしての修練をつんだせいだろう。

私は一流のSPとなったかわりに、なにか大事なものを失ってしまったのではないだろうか？

思い至った瞬間、唐突に視界が揺れた。

泥沼の上に立っているかのように不確かな感覚。

このままではいけない、そう思った瞬間にその声は静寂が支配していた廊下に響いた。

「なんだ、簡単なことじゃない……」

決して大きいとはいえないその声は、ひどく冷たい響きを持って、私たちの耳を振るわせたのだった。

「うん、うん。簡単なことだね、何でいままで気付かなかったんだろっ」

自分自身に言い聞かせるような口調ではあるが、その呟きはその場の空気を凍らせた。

そしてゆらりと立ち上がる声の主　佐藤はどこか無機質に思える目で、姫を見据える。

視線が向けられた瞬間、一瞬身体を震わせる姫。

少しずれた場所から私が見たその瞳には、特に色が浮かんでいるということはない。

だがそれこそが異常。

目は口ほどに物を言うというが、佐藤の目は何も伝えてこない。何も無いのだ。

「佐藤、一体なにが簡単なことなのだ？ 私たちにもわかるように説明してもらいたい」

「あれ、鉄先輩いたんですか。やだなあ、わたし浮かれちゃってるのかな？」

くすくすと笑いを漏らす佐藤の表情は、貼り付けたような微笑。

ゾクリ、と、背筋が震えた。

この感覚は、これまでも何度か味わったことがある。

そしてそのすべてが、決して良いといえない出来事の直前に襲ってくる。

しかしこれまでは修行の最中だとか、SPとしての戦いの中のように、命の危険がある場所では感じなかったものだ。

それが今この瞬間に何故。

「どうして浮かれているのだ。レオが怪我をして危険な状態にあるというのに」「

「そうですよね、対馬君が大変な状況だっというのにわたし……」

反省しているような言葉をいう佐藤、しかしその表情は変わらな

「でもわたし気付いちやっただですよ、鉄先輩」

一歩、私に向かって歩を進める。

「どうして対馬君がこんなことになってしまったのか」

一歩、今の佐藤は危険だ。そう私の勘が訴えている。

「その理由に気付いてしまったら、もう他のことなんて考えられませんかよ」

一歩、無力化しようと思えば、それこそ数秒もかからず為せるだろう。

「どうしてなのでしょうね」

一歩、もう私と佐藤の間に距離はほとんどない。

「どうして霧夜さんと対馬君は、出会ってしまったんでしょうね」

ガラスが割れるような幻聴が、私の頭の中に響いた。

第八話

「二人が出会わなければ、対馬君がこんな状態になることもなかったはずですよね」

佐藤の言葉に耳を貸してはいけない。

そう思いながらも、心のどこかでその通りだと同意している私もいる。

「悔しいなあ。やっぱり学生の時にもう少し頑張っておけばよかった」

佐藤が何に対して悔しいといっているのか、そちら方面には鈍い私でもわかってしまった。

恐らく佐藤は、これまで色々なことを我慢しすぎたのだろう。

その反動が今この状況だ。

「……これ以上ここにいたらおかしくなっちゃいそう。霧夜さん、鉄先輩、ここはお任せしますね」

立ち去っていく佐藤の足音が、妙に大きく聞こえる。

そして一人減った空間には、ひやりとした嫌な空気が流れ込む。

「……姫」

「確かに、私たちが出会わなければ、レオは撃たれたりすることもなかったでしょうね」

「『たられば』の話を始めたらきりがない。そう、きりがないんだ」

「そんなことはわかってるのよ！」

滅多に聞くことのない姫の後悔に満ちた声。

「けどしょうがないでしょう！ 私のせいで、一番大切な人が撃たれた！ 私のせいで！」

確かに、狙われていたのは姫であるから、責任が姫にあるともいえる。

しかし私たちはSPとして、責任を依頼主に求めたりはしない。

「姫、それは違う」

そう、私たちに万が一があったとき、その責は全て……

「撃たれ、生死の境に陥っている。そんなことになった責任は」

私も、レオも、他の全てのSRPもその覚悟でやっている。

「責任は……全てその者自身が負う。つまり……」

これを告げるのは流石に躊躇う。しかし、これは私が言わなければならぬ。

「今回の負傷の責任は、全てレオ自身にある」

自分の身に起こった全ての事態は、全て自分の責任である。

今回も、レオが防弾チョッキを着ていれば、ここまでの重態にならなかったかもしれない。

その点で言えば、レオは準備を怠ったともいえるのだ。

しかしなにより……

「そして、部下の管理ができなかった私の責任だ」

そう、私がつまぐやっていたら、レオも負傷せずにすんだ
だろう。

あの時、どんな手段を使っても防弾チョッキを着せていけばよ
かった。

ふっ、姫に『たれば』の話をしてもきりがないといったくせに、
当の私これがこれだ。

それから私たちの間には会話もなく、静かな時間が過ぎる。

そして、手術中のランプから灯りが消えた。

第九話

私も乙女さんも、言葉を発することが出来ない。

病室の中に響くのは無機質な時計の音と、レオの規則正しい呼吸音。

呼吸器を通したその音は、レオ自身で生きようという意志が感じられなくて嫌になる。

手術は成功、腹部の傷は深いものの、確実に治るらしい。

だけど右腕の傷が厄介で、神経を引き裂き、銃弾は骨の半ばまで食い込んでいたらしい。

弾は摘出できたし、神経も繋げることは出来た。

だがあくまで繋ぐことが出来ただけであり、以前と同じように動く保障はないそうだ。

それどころか日常生活を送るのにも、支障がでる可能性のほうが高いとのこと。

当然のことながら、SPとして復帰はまず無理だろう。

それを言わなければならないのか、悲しむべきなのか、一体私はどうすればいいのだろう。

「姫、今日は一度戻ろう。ここに居たところで、レオが目を覚ますわけではない」

「そんなことわかってるわ。私がここに居たいから居るだけ」

「だが、今日の事件に対する対応などもあるのだろうか？ それにあいっことがあったんだ、思った以上に気持ちは疲れているはずだ」

「そんなの問題ありません、よっぴーが……」

訪れる沈黙。

私が歩いてきた道は間違えていたのだろうか。

親友には見放され、最愛の人は傷つき倒れている。

もっと違った道であれば、こんなことにはならなかったのかもしれない。

「佐藤は、これからどうするのだろうか」

「わからないわ。あんなになるくらいまで我慢してるなんて、思っ
てなかったもの」

「感情を笑顔で隠すのが上手いからな、いくら姫とて気づくのは難
しかっただろう」

よっぴーがレオの事を好きなのは知っていたけれど、その気持ちには折り合いをつけてくれているものだと思っていた。

だけどそうじゃなかった。

折り合いをつけたように見せて、必死でその気持ちを押しさえつけていた。

それは全て私の、いや、レオのためだったのだろう。

レオを困らせないために、自分の感情を殺していた。

そのことで、これまでどれだけ苦しんだのかわからない。

恐らく、もうよっぴーが私の元に戻ることはないだろう。

彼女は極めて有能だったから、仕事の面での影響は大きい。

だけどそんなことよりも、信頼できる人間が減ってしまうことの方が痛い。

子供の頃から、周りは信じられなかったし、信頼できる人間を得ることの難しさも知っている。

レオが起きたら何ていうだろうか。

規則正しい呼吸音を聞いていると、なんだか目頭が熱くなってきた。

「……帰りましょう、ここにも出来ることは何も無いわ」

廊下へ出ると、先ほどまで寒いと感じていた病室よりもひどい。

響くヒールの音だけが、反響して消えていった。

第十話

「……眩しい」

目が覚めて始めに感じたのは、真っ白な強い光。

その眩しさに慣れると、清潔感を感じさせる白い天井が目に入った。

ゆっくりと身体を起こすが、腹部が鈍い痛みを訴える。

その痛みで、自分が撃たれた事を思い出す。

まだまだ未熟だなと反省すると同時に、エリカを心配させてしまっただろうかと思う。

何せ目の前で撃たれ、意識まで失ってしまった。

しかもそれは自分の恋人ときたものだ。

立場を逆にして考えてみる。

俺が護られる側で、エリカが撃たれて……

やばいな、俺だったら取り乱して大変なことになる。

今この病室には俺一人、だけどいずれ人は訪れるだろう。

そうすればエリカに俺が起きたことが伝わるのは自明。

始めに会ったときになんと言おう、やはりまずは謝ったほうがいいだろうか。

そんなことを考えていると、カチャリと控えめな音を立ててドアが開いた。

ふと視線をやれば、そこにはちょうど何を言っべきかという問いの相手であるエリカがいた。

驚いているのか切れ長な目は見開かれ、手に持った花束はふるふると震えている。

「えーっと、おはようございます?」

直後、俺の胸へと飛び込んできたエリカを受け止め、悲鳴を上げたとしても、俺は悪くない。

悪くないはずである。

俺の悲鳴を聞きつけてやってきたのか、主治医と思われる人から説教を受けているエリカを眺める。

怒られているはずなのに背筋はぴっと伸び、堂々とした振る舞いだ。

事情を知らない人が見たら、まさか怒られている場面だとは思わないだろう。

そんなエリカの姿を見てみると、思わず笑みがこぼれる。

護ることができてよかった。

常に最悪の状況を想定して動いていてよかった。

この、俺なんか到達することの出来ないような高みへ行くことができる彼女を、傷つける結果にならなくてよかった。

俺自身が傷つく結果になったけど、そんなのは些細なことだ。

俺はエリカが頂点に立つところを見るために、毎日がんばってきた。

仕事のパートナーとして隣に立つことはできなくても、護る側として背中合わせに立つことはできる。

後は傷の痛みがなくなるまでは静養して、また訓練を再開しなければ。

今回の失敗は繰り返さない、命が助かったのははつきり言って偶然だ。

もっと余裕を持って、エリカを護るのはもちろん、自分自身も傷つかないようにならなければ。

「……それでは、あなたのほうから伝えてください」

「はい、こうなったのも私の責任ですから」

何時の間にか説教は終わり、別の話をしていった医師は、俺に一声かけると部屋を出て行った。

容態の確認とかはしなくていいのだろうか。

「色々あったけど、あなたが目覚めてよかったわ、レオ」

「それならそれらしく、もっとうれしそうに言ってくれ」

よくわからないが、今のエリカの声は沈んでいる。

少なくとも俺が目覚めたことを、素直に喜べる状況ではないということか。

と、なると考えられるのは。

「エリカを襲った相手、わからないのか？」

「いいえ、そっちはもう手を打って、社会的にも抹殺してやったわ」

そつちの話じゃないのか。

なら残った可能性は一つ。

「俺の怪我、やばいの？」

エリカが息を飲んだのがわかった。

やっぱり、か。

腹部の傷は疼くけど、我慢できないほどではない。

むしろ俺の心配は、この感覚のない右腕だ。

「……レオの右腕は、もう動かないかもしれないわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6920n/>

LionKnight

2010年10月15日22時27分発行